

SRI アナリストとは、企業の CSR（社会的責任）を評価する仕事ですが、それでは企業の CSR とは何かでしょうか。当社では、それを、企業活動における E（環境）S（社会）G（ガバナンス）への配慮だと定義づけ、その配慮のレベルが、企業の長期的な成長や競争力、さらに企業価値の増大につながるのではないかと仮説をたて、検証しています。企業が社会的責任を果たすことを、何よりも競争力の源泉とみなしているのです。たとえば環境への配慮は、より省エネ・省資源をもたらす環境技術の開発につながりますが、本業でつちかった、そのような技術の蓄積が、全く領域の異なる分野で生かされ、新たな商機をもたらすケースなどにも着目します。

製缶において国内トップクラスのシェアを持つ企業の本業の技術が、新規事業につながった例を紹介しましょう。

「DNA チップ」というものがあります。大腸菌やサルモネラ菌など、調べたい対象物が触れると、チップの表面にある DNA が反応して蛍光物質が光り、菌の種類が特定できるというものです。これまでは、特定したい菌の種ごとに検査していました。チップの表面には樹脂が塗ってあり、ひとつのチップには 1 種類の DNA しか載せていませんでした。しかし、この会社が開発した、炭素結晶をチップに薄く平らに塗る技術によって、高密度に複数の DNA をチップに載せることが出来るようになりました。同時に 4 種類までの菌を調べられるようになり、検査の作業手順も 4 分の 1 以下、検査期間も 2 分の 1 になるという効果が表れました。この「薄く平らに塗る」技術は、飲料用の缶に使われる鋼板を製造している同社の本業で培った研磨やメッキの技術そのものであり、それが新しい分野で応用された例です。同社は今から 20 年以上も前の 1990 年代、本業の製缶分野でも、革新的な環境配慮型製品を開発しています。材料や製缶プロセスを根本から見直し、従来品では 1 缶の製造につき 150ml 使用していた水資源を、まったく使わないですむようになったほか、製造工程の固形廃棄物量が 100 分の 1 以下になり、従来品よりも 18% 軽量になるなど、画期的なものでした。

このように同社はイノベティブな企業カルチャーを持っていることがうかがわれます。今後、人口減による国内市場の縮小、食品容器業界の需要の頭打ちの中で、この技術が医療や食品などの広範な分野で実用化され、また、海外事業にも展開されるなら、同社の収益源の多角化と成長の強い牽引力になります。そのような視点から、長期的に同社をウォッチし、S（社会への目くばり）、G（企業統治のあり方）がこの成長を推進するように機能しているかどうかを、さまざまな定性・定量情報にあたりながら、定点観測していくのが、SRI アナリストの仕事といえます。